宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2023

購読料（税込）
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

悲しみ新たに令和5年全国戦没者追悼式

天皇皇后両陛下が追悼と平和の祈り

日本武道館

終戦後78年の8月15日、東京都千代田区の日本武道館で政府主催の全国戦没者追悼式が開催された。当日は、天皇皇后両陛下が御臨席され、岸田文雄内閣総理大臣、衆議院議長（代理）、参議院議長、最高裁判所長官、各国務大臣、各都道府県代表、関係団体の代表ら合わせて約2700人が参列し、約310万人を数える全戦没者に追悼の誠を捧げた。

おことばを述べられる天皇陛下=8月15日、東京都千代田区の日本武道館

午前11時51分、開会が宣言され、全員が起立して両陛下を迎える。国歌斉唱に続き、岸田総理が式辞を述べた。

「祖国の行く末を案じ、家族の幸せを願いながら、戦場に斃れた方々。戦後、遠い異郷の地で亡くなられた方々。広島や長崎での原爆投下、各都市での爆撃、沖縄での地上戦などにより犠牲となられた方々。今、すべての御霊の御前にあって、御霊安かれと、心より、お祈り申し上げる。今日の我が国の平和と繁栄は、戦没者の皆様の尊い命と、苦難の歴史の上に築かれたものであることを、私たちは片時たりとも忘れない。改めて、衷心より、敬意と感謝の念を捧げる。戦後、我が国は一貫して、平和国家として、その歩みを進め、歴史の教訓を深く胸に刻み、世界の平和と繁栄に力を尽くしてきた。未だ争いが絶えることのない世界にあって、我が国は、積極的平和主義の旗の下、国際社会と手を携え、世界が直面する様々な課題の解決に、全力で取り組み、今を生きる世代、そして、これからの世代のために、国の未来を切り拓いていく」

両陛下は標柱の前に進み深く一礼された。正午の時報に合わせ二分間の黙祷を捧げられ、両陛下に合わせ、参列者が同様に黙祷を捧げた。

天皇陛下がおことばを述べられた。

「本日、『戦没者を追悼し平和を祈念する日』に当たり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。

終戦以来78年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられましたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがあります。

これからも、私たち皆で心を合わせ、将来にわたって平和と人々の幸せを希求し続けていくことを心から願います。

ここに、戦後の長きにわたる平和な歳月に思いを致しつつ、過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、全国民と共に、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります」

細田博之衆議院議長（海江田万里副議長が代読）、尾辻秀久参議院議長、戸倉三郎最高裁判所長官の追悼の辞の後、中国廣西省で戦死した、横田正則陸軍兵長の子・横田輝雄氏が遺族代表として追悼の辞を述べた。

「父は昭和19年4月最愛の家族の安寧、祖国の安泰と平和を願い出征していった。母は3番目の子供のことを知らせるため何度も手紙を書いたが、父のもとに届くことはなく、父は昭和20年5月に中国で無念の戦死をされた。家族は悲しみが深く、心が折れそうにもなるときもあったが、励まし合って懸命に生きてきた。今日の平穏な生活は戦没者の尊い犠牲の礎の上に築かれたものであることを決して忘れない。依然として戦争は絶えず、尊い命が失われている。ロシアのウクライナへの侵攻は言語道断で、先の戦争を思い出さずにはいられない。我が国が平和の実現にむけて果たすべき役割は小さくない。私達遺族は戦争の悲惨さとの平和の尊さを孫、ひ孫の世代へと語り続けることを誓う」

献花となり、岸田総理、衆議院副議長、参議院議長、最高裁判所長官、日本遺族会会長、各都道府県遺族代表、一般戦災死没者遺族代表、原爆死没者遺族代表、青少年代表、参議院副議長、各国務大臣、各政党代表、各団体代表者が黄色菊を捧げた。最後に加藤勝信厚生労働大臣が献花して、式典は滞りなく終了した。

社説

災害を語り継ぐ宗教施設

9月1日「防災の日」は大正12年（1923）同日の11時58分に発生した関東大地震の教訓から「広く国民が台風、高潮、津波、地震等の災害についての認識を深め、これに対処する心構えを準備する」ために制定された。今年は大地震から100年目になる。

死者・行方不明者10万5千人の多くが東京府（今の東京都）だったため、震源地も東京と思われがちだが、地震学者の武村雅之名古屋大学教授によると、始まりは神奈川県西部の松田町付近で、同県下から千葉県の房総半島南部にわたって発生した。

東京で大量の死者が出たのは木造家屋の密集地などから起きた火災が大きな原因で、とりわけ急速な工業化で居住が広がった隅田川東の軟弱地盤の地域がひどかった。木造住宅密集地域の問題は今も未解消である。

碑が語る歴史

横浜市鶴見区にある真言宗智山派の東漸寺の境内に大川常吉の石碑がある。関東大震災の時、鶴見警察署長だった大川常吉は、朝鮮人暴動のデマが流れ、激昂した一部暴民が朝鮮人を虐殺しようとしたのを身を挺して抑え、多くの朝鮮人や中国人を救った。石碑は昭和28年（1953）、在日朝鮮統一民主戦線（朝鮮総連の前身）により建立され、同寺には大川の墓もあり、地元の児童・生徒が社会科の学習などに訪れている。

関東大震災朝鮮人虐殺事件の犠牲者数は、政府が実態調査を行わなかったこともあり不明で、数百人から6000人、中央防災会議では震災犠牲者の1～数%、一千～数千人と推定している。当時の記録では、民間人により殺害された朝鮮人は2333人、内地人は58人、中国人は3人で、朝鮮総督府東京出張員は813人と推定している。

後に映画監督になった黒澤明は13歳で震災を目撃しており、おびただしい死者の惨状は一生忘れられない、と自伝に書いている。また、黒澤の父親が長髪を生やしているという理由で朝鮮人に間違われ暴徒に囲まれた話や、黒澤が井戸の外の塀に書いたラクガキを、町の人々が「朝鮮人が井戸へ毒を入れた目印」だと誤解し騒ぎになったこともあったという。未曽有の惨劇に殺気立ち、正気を失ったのである。

話を戻すと9月2日、自警団が井戸に毒を入れたという4人の朝鮮人の男を連れてきた。彼らの1人がビンを2本持っていたので、井戸にビンの毒を入れたと騒ぎになったのである。大川は4人は東京に避難するところで、ビンの中身は毒薬ではないと自警団に説明したが、納得しないのでビンの中身を飲んで証明した。4人は中国人で、ビンはビールと中国の醤油だったという。

しかし、流言蜚語は増すばかりで、朝鮮人が署内に収容できないほど連行されてきた。大川が彼らを總持寺に移動させると、3日に自警団は武器を持って同寺に集まり、朝鮮人の引き渡しを要求した。大川は朝鮮人を鶴見分署に移動させ、「朝鮮人が悪いということはない」と説得したが、群衆は騒ぎ立て、地元有力者らも追放を迫り、鶴見分署は千人以上の群衆に囲まれた。

大川が「鮮人に手を下すなら下してみよ、憚りながら大川常吉が引き受ける、この大川から先きに片付けた上にしろ」と叫ぶと、相談した代表者数名が「警察が管理できずに朝鮮人が逃げた場合、どう責任をとるのか」と迫るので、大川が「切腹して詫びる」と答えると、「そこまで言うなら」と群衆は解散した。こうして朝鮮人220人、中国人70人が守られたのである。後に大川は、「当時あのような行動に出たのは自分でも意外で、あれほどの勇気を今になって持ち合わせているだろうか」と話していたという。

在日コリアンの作家からこの話を聞いたソウルの病院に招かれた大川署長の孫の豊さんは1995年、病院スタッフ約200人に講演した。豊さんは「祖父がしたことはそんなに褒められることなのでしょうか」と語り始め、「当時、日本人が韓国朝鮮の方にあまりにひどいことをしたため、当たり前のことが美談になってしまった。私が日本人としてみなさんに申し上げる言葉は、これしかありません。『ミアナムニダ』（ごめんなさい）」と続けると会場は拍手に包まれたという。

物語が生きる力に

大川氏の碑のほかにも、関東大震災にかかわる慰霊碑や記念碑が寺の境内などに数百基、地域の物語を語り継いでいる。長い歴史を有する寺や神社などの宗教施設は、それぞれの地域の記憶を留める場所でもある。近代的な博物館や美術館が建設される前は、寺社の宝物館などがその役割を果たしてきた。

一人ひとりが物語を紡ぎながら成長するように、地域社会にも共有される物語があり、それがやがて文化として実を結び、人々の生きる力にもなっている。

東大寺で「大仏のお身拭い」

すがすがしい姿でお盆に

奈良市

ゴンドラに乗って大仏のほこりを払う奉仕者たち＝8月7日、奈良市の東大寺大仏殿

奈良市の世界遺産東大寺の大仏殿で8月7日、本尊の盧舎那仏坐像（国宝）のほこりを拭う「お身拭い」の法要が執り行われた。毎年お盆を迎える前に行われる奈良の恒例行事で、堂内は窓や扉が開け放たれ、「奈良の大仏さま」として親しまれている大仏の頭の先から膝下まで溜まった1年分のちりやほこりが払われた。

この日早朝、白装束にわら草履をはいた僧侶、信徒、関係者ら約170人は、二月堂湯屋で沐浴して身を清め、大仏殿に参集し、まず大仏の魂を抜く撥遣（はっけん）法要が執り行われた。橋村公英東大寺別当をはじめ参集者全員による般若心経の読経の後、お身拭いの奉仕が始まった。高さ15メートルある大仏の頭頂部には体内から登って上がり、膝や手のひらへは下から登り、また顔や胸など垂直で高さのある部位は天井からワイヤーでつるした3基のゴンドラに人が乗り込んで、箒（ほうき）やはたきをかけてほこりを払い落とした。

頭頂部に登った奉仕者は、大仏の頭に付けられた巻き貝のような「螺髪（らほつ）」と呼ばれる髪の毛の間を、ハタキや布できれいにしていった。十数メートルの高さにある螺髪に手と足をかけてその間を掃除する姿は、見ていてハラハラする。ハタキをかけるたびにちりやほこりがもうもうと舞ったが、「線香の灰や花粉が混じったほこりを被ることも、ご利益の一つ」とされている。このお身拭いの作業の間に、一年間に奉納された写経や写仏が大仏の胎内に収められた。

参拝者は、大仏に白装束の奉仕者が取り付いて掃除する珍しい姿を写真に収めていた。「大仏さまの上に人が乗ることによって、大仏さまがどれほど大きいかがよく分かった」という声も聞かれた。また両親と共に参拝した小学生は、「高いところでゴンドラに吊り下げられながら掃除をしていて怖くないのかな」と見上げながら、「大仏さまもほこりが落ちて気持ちよさそう」と話した。

東大寺の橋村別当は「大仏さまがきれいになるのをご覧頂いて、見る人たちも同じようにすがすがしくなったり、気持ちが落ち着いたりするのを感じて頂ければ嬉しい」と話した。また、中門や回廊を含めた大仏殿全体も掃除された。

作業は9時半頃に終了し、黒光りする姿の大仏が現れ、その後大仏殿の消防設備の放水銃などが試験された。なお、お身拭いの法要はかつては住職一代につき一度だけだったが、1964年からは毎年8月7日に執り行われている。

清掃に先だち撥遣法要で読経する橋村公英別当

灯

「はっきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる。また、はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（マタイ18：18―20）

2000年前、イエスが弟子たちに語られた説教は、選民の果たすべき役割を教えている。敷衍すればそれが宗教者の使命といってもよい。この世に満ちた悪なるしがらみから人々を解き放ち、善なる神との絆を結びなおす手助け役を担っているともとれる。人類の根本的な苦しみの基を断ち、創造主なる神を親として慕うことができるようにするために来た、神のひとり子たるイエス自身の自覚が現れているものだろう。私たちをも神共に生きる喜びと安寧の境地に導こうとしている。それゆえに、虚心坦懷、天を仰ぎ共に集い共に祈ることこそ大切なのだ。（I）

天地

地域の防災訓練の一つとして自治会長や小学校の先生たちが100人ほど参加し、避難所運営ゲーム（HUG）が行われた。静岡県が開発した図上演習で、震度7の地震発生で被災した人たちのため小学校に開設された避難所を7人で運営する▼自治会長で防災士でもある天地子はチームのリーダー役として、「老人2人と夫婦、子供3人の家族が来た」「障害者のいる家族が来た」「駐車場を決めてほしい」「対策本部から支援物資が届くので置き場所を設置してください」など書かれたカードを次々を読み上げ、何の事前打ち合わせもなく6人がそれに対応する▼オリエンテーションの講師から、リーダーはカードを読むだけで指示を出してはいけないと言われていたが、学校の平面図を見ながら思案している6人に、「まずは通路を決めたら」と言ってしまった。すると女性教師が、赤のマジックインキで「幅はどうしよう」と言いながら、体育館に線を引いた▼遅れてきた自治会長の男性は、腕を組んだまま眺めるだけで、動こうとはしない。知り合いらしい2人の若い男性は、ああだこうだと話すだけでなかなか決められない。会社や役所だと上位下達ことが進むのだが、地域ではそうはいかない。対等な立場の人たちに共感を広げていくしかないのは、自治会運営で何度も経験してきた▼でも、それが人間社会の基本ではないか。いわば「利他」の集積により成り立つ集団で、宗教が説いてきたこと。幸せな社会づくりに結び付いているように思えた。

宗教新聞社
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税・郵送料を含む）

本紙定期購読のお申し込みは

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11
電話:03-6265-0852 FAX:03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠著 四六判・520頁 定価：本体2,000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078(882)9305 FAX078(801)0006

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

日本国始め 饒速日大神の東遷
『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）
大野七三 著
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纏向の地に大和国を建国、その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36
鳳明ビル102A
TEL03-3813-6344 Fax03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

新刊！
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土恵想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15
ラ リュミエール1F
TEL03-6657-9000 Fax03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

第七刷り出版記念発売
植物霊物語
なぜ柳の木の下に幽霊がでるのか
樫の木を植えると金は残らない
財産を増やすにはカリンを植えろ
勝負に勝つには…勝栗のいわれ
クルミを手の中で握る理由は
酔ってクダまくコショウの木の霊
ガンの原因は植物霊の動き ――その他
近代文芸社刊
定価 1,000円 税込 送料無料
お問い合わせは下記へ
アシレス出版部
〒252-0202
相模原市中央区淵野辺本町2-17-14
TEL042(751)2558 FAX042(754)1818

JR中央線の死を招くホウの木のタタリ
〝これが本当の話しなら植物霊こそ殺人魔だ！〟
小冊子 A5判 10頁 一冊500円
三冊 1000円 税込 送料無料
アシレス出版部
〒252-0202
相模原市中央区淵野辺本町2-17-14
TEL 042(751)2558
FAX 042(754)1818